

彼に手紙を書けるなら

弘前大学教育学部附属中学校

西 田 そ の

「だが声がない。
どうしてもでない——。」

書店で何気なくページをめくつているとき、最後のページのこの文章に目が止まった。喜びや嬉しさのあまり、感極まつて思うように声がでなくなることはあるだろう。しかし、この文からは、思いが込み上げすぎて気持ちを言葉にできない「苦しさ」が伝わってきてとてもひかれた。物語の内容を全くわからなくとも、なにか、人間の感情のもどかしさを強く訴えかけるものを感じたのだ。それがどうしても気になり、私はこの本を手に取った。

この物語は、主人公「直貴」と、彼の兄であり強盗殺人の罪で服役中の「剛士」の手紙を通しての関わりを描いたものである。剛士以外に身内のない直貴は、兄の犯した罪によつて音楽、夢、恋愛のすべてがうまくいかず、社会で孤立したと感じてしまう。

「結局こうなるのだ——。」

「本当にあなたはそうだった？」

日々疎外感を噛み締める直貴は、自分の人生に対しても自棄になつてしまふ。すべてをあきらめなければならず、世間の目を気にして生きていく人生は、私には想像できない。兄の存在を隠して生きていくことをするたびに、彼の人生への期待が絶望に変わっていく様は読んでとても辛かつた。そして、直貴はいつのまにか、兄からの手紙を受け取るのを苦痛に感じて返事も出さなくなつてしまふ。それはおそらく、送られてくる手紙が直貴にとって、獄中の兄の存在を示すただ一つのものだったからだろう。「俺は悪くないのに」と、心の中で燃つっていたやり場のない怒りを兄にぶつけ、手紙を読むたびに自分の人生や兄を憎むようになつたのだ。「自分の人生をめちゃくちゃにしたのは兄貴だ」と。

直貴は兄のせいで不幸な人生を歩んできたのかもしれない。直貴は可哀想な人でもあるのかもしれない。しかし、私は直貴に、

と聞きたい。何故、兄は罪を犯したか。それは、貧しいけれども就職しながら大学へ行こうとする直貴の学費を手に入れためだ。金銭的な問題で大学に行くことは難しく、仕事のしそうで兄の体はぼろぼろだった。そんな状態で、大学も就職も諦められない直貴は、少し中途半端なのではないか。自分の夢をあきらめるのはとても苦しい。また、「大学を諦めるのは兄貴が反対する」と直貴は思うはずだ。けれども、幼い頃から二人三脚で歩いてきた兄を思うのならば、たとえ反対されようとも「就職するんだ」と決断し伝えるべきだった。なぜなら、兄は直貴が大学へ行くことも望んでいたが、本当に望んでいたのは直貴が幸せに生きることだったから。私にはそう思える。直貴にとって、兄はこの世でたった一人しかいない大切な存在で、兄にとつてもそうだ。無理をしながら働き、強盗を行つて弟を幸せにしようとした兄の決断は間違つていた。しかし、自分と兄のどちらの思いも汲もうとするあまり決断できなかつた直貴は可哀想といえるのだろうか。どちらが悪いとは、簡単には言い切れない。

私は弟が一人いる。喧嘩することもあれば、弟が何をしたいのか理解できないときもある。けれど、もしこの二人のような状況になつたなら、強盗殺人は絶対にしないが、私も兄のように自分よりも弟に幸せになつて欲しいと思うだろう。しかし、弟に私が身を粉にしてまで働くことを望まない気持ち

ちがあるならば、私と弟はどうとも幸せにはなれないと思う。おそらく、直貴にも同じ気持ちはあつたはずだ。しかし、その気持ちがありながらも、彼は兄の「幸せになつて欲しい」という本当の思いに気付けなかつた。いや、気付いたつもりでいたのだと私は感じた。

私は、人は誰かを思い、思い合つて生きようとするのだとと思う。しかし、互いの思いが噛み合わなかつたり、本当の思いに気付けないときもある。人間の感情は複雑で厄介だ。でもだからこそ、互いの気持ちを伝え合い、共有していくことが大切なのだ。兄はそう思つたからこそ、弟に手紙を書き続けたのではないのだろうか。

直貴が自分の人生に対する絶望しているのは、彼自身に決断力がないからだと私は思う。彼が幸せになることができないのは、どこかで幸せをあきらめているからだ。それならば私は、直貴に手紙をきちんと読んでほしい。兄が自分の幸せを切に願つていてることに気付き、自分を思つてくれている兄の愛を忘れないで欲しい。そうすれば、直貴はたとえ兄を恨む気持ちがあつても彼を受け入れられ、自分の幸せへの道をしつかりと決められると強く思う。

もし、直貴に手紙を書けるのなら、私はこれらの思いを兄の手紙に添えて、彼に届けたい。